

買春について

昨年、たまたま、「性の商品化」に関してメディアの作り手や送り手がどのように考えているかを調査する機会があった。そのなかで、四十代の男性の五三%、三十代の九一%がアダルトビデオを見たことがあると答え、四十代の四一%、三十代の五二%が「国内での買春」の経験があると答えた。

買春について、もう一つのデータがある。日本青年団協議会が編集した『女と男の未来予想図』という冊子のなかに、山形県内の青年団体が地区内の若者を対象に行ったアンケート調査の結果が載っている。「男性がソープランドなどへ行くのは仕方がない」と思うかという設問に対して、男性の三八%が「思う」と答えている。ほかに「どちらともいえない」が四〇%あり、「思わない」は一九%しかない。

私は常々思うのだが、男はどうして買春するのだろうか。そんなことをして楽しいのだろうか。むなしくはないのだろうか。でも、する人にとっては、やはり、それは楽しいからするのだろう。

だから、そこまでは譲るとして、私

世いかつエッセー 吉田 清彦



できて、そして、「結婚」ができるという精神構造である。買春の相手も結婚の相手も同じ女性だというのに。

男は女を「妻」と「娼婦」の二種類に分けて考え、妻には「貞淑」を、娼婦には「淫蕩」を求めると一般に言われるが、そんな器用な使い分けがよくできるものだと思う。

先日、既婚のある男性とこの問題について話し合う機会を得たので、「なぜ買春するのか」と聞いてみた。私とほぼ同年代の彼は「いつもそんなことをするわけではないが、たとえば旅行先などで、夜、酒を飲んだときなど、その種の場所にでかけることがある。男は普段、仕事でストレスがたまっているの、そんな時にそんな気になるもの、もしかたがないのでは」と答えた。そこで、私は「じゃあ、もしあなた

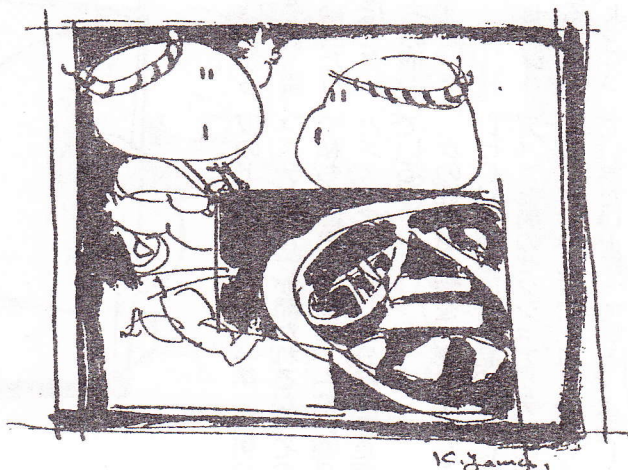
が理解できないのは、一方では買春すること、にためらいを持たない人が、その一方で「恋愛」が

ずいぶん勝手な言いぐさではないか。女性も身の人間であるということを、いままでも考えたこともないのだろう。

でも、この国では、こんなふうに見える男の方がまだ多数派なのだろう。ひところ農協の買春ツアーが問題になったことがあったし、企業の成績競争のご褒美が東南アジアへの買春旅行だという話もまだ漏れ聞く。

だが、その一方で、新しいきざしもうかがえる。昨年、兵庫県青少年本部と兵庫県、それに兵庫県立女性センターの共催で開かれた「青少年のための性に対するシンポジウム」で基調講演をされた「人間と性」教育研究協議会代表幹事の村瀬幸浩さんが、次の

「(三)「ミ」屋台村通信」発行人



<はやく はやく>山口 勝幸